若者の友人関係とジェンダー（３）

―「ひとりぼっち」化する男子？―

中央大学　　辻　　泉

１　目的

本報告の目的は、若者の友人関係とジェンダーについて、とりわけそれが不得手と言われることの多い男性に注目し、調査データを元にして実態を明らかにするとともに、今後に向けての展望を考察していくことを目的とする。若者の友人関係とジェンダーとの関わりは、今回の３つの連携報告の共通テーマであり、なおかつ近刊予定の書籍（辻・辻・土井編，近刊）でもメイントピックの一つをなす重要なテーマである。

例えば青少年研究会（JYSG）が、2002 年と 2012 年に、杉並区と神戸市の 16~29 歳の若者を対象に行った調査結果を比べてみると（調査の詳細は、藤村・浅野・羽渕編，2016 参照）、2002 年では、親友がいないものは全体でみても 6.9%と少数であり、女性 6.7%に対して男性 7.2%と統計的に有意な差も見られなかったが、2012 年になると、親友がいないものは全体で 9.4%とやや微増し、女性が 6.8%とほぼ変わらないのに対し、男性は 12.3%と増加傾向にあり、統計的に有意な差も見られた（１%水準）。いわば、男性の 10 人に１人以上が親友がいないと答えていたということである。またこれを年齢層別にみていくと、20 代後半（25～29 歳）では、親友がいないと答えたものの割合は、2002 年 8.4%、2012 年 8.8%と変化していないのに対し、20 代前半（20～24 歳）では、同じく 6.6%から 10.1%へ、さらに 16～19 歳でも 5.4%から 9.2%へと増加し（いずれも 10%水準の有意性）、若者の中でも特に下の年齢層において、男性たちのいわゆる「ぼっち」化が少しつづではあれ、進んでいることが伺えよう。

２　方法

本報告では、青少年研究会の有志が 2010 年に実施した全国 26 大学の学生 2831 名を対象にした調査（詳細は辻泉，2017 参照）を取り上げて議論を進める。それは、この調査が特に若い年齢層である大学生に絞って、全国の多様な大学を対象にするとともに、友人関係や「男らしさ」について詳細な質問を行った調査だからである。具体的には、特に男性の結果に注目しながら、若者の友人関係とジェンダーについての実態を明らかにし、そうした実態が一体何に規定されているのかについても、「男らしさ」に関する項目の回答結果などから明らかにし、その上で今後の展望を考察していく。

３　結果

友人満足度では男女差が見られなかったが、友人数やソーシャルスキル、メディア利用に関わるいくつかの項目では、男性は女性を下回り、相対的にアンコミュニカティブな様子が窺えた。さらに男性に絞って、その規定要因を探ると、親友の有無についてはソーシャルスキルの多寡が、ソーシャルスキルについては、暮らし向きや大学の難易度といった基本属性に加えて、メディア利用頻度、「男らしさ」に関する意識が関連していることが窺えた。当日はさらに詳細な検討を行う予定である。

文献　藤村正之・浅野智彦・羽渕一代編，2016,『現代若者の幸福－不安感社会を生きる』恒星社厚生閣．／辻大介・辻泉・土井隆義編，近刊,『みんなぼっちのゆくえ－〈流動化する友人関係〉の社会学』岩波書店．／辻泉，2017,「大学生たちのパーソナル・ネットワークの実態 ：2010 年全国 26 大学調査から探る」『人間関係学研究：大妻女子大学人間関係学部紀要』18：125-139.